

2022 年 9 月

食料安全保障月報

(第 15 号)



令和 4 年 9 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 9 月食料安全保障月報（第 15 号）

目 次

概要編

I	2022 年 9 月の主な動き	1
II	2022 年 9 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報	5
	中国・インド・パキスタンの穀物生産・貿易動向	
	【参考】“ジャスマイ”とは？	

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増	
	＜豪州＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ とうもろこし等の代替で、小麦の飼料用需要が上方修正	
	＜中国＞ 7 月の小麦輸入先国は豪州が 99.7%を占めた	
	＜ロシア＞ 生産量は前月から 3.0 百万トン上方修正で史上最高の 91.0 百万トン	
	＜ウクライナ＞ 生産量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正の 20.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より半減	
3	コメ	1 5
	＜米国＞ 生産量は収穫面積減少により 1993/94 年度以来の低水準に	
	＜インド＞ 2022 年 9 月 9 日より輸出規制中（碎米（100%）輸出禁止等）	
	＜中国＞ 2022/23 年度の生産量は南部の高温・乾燥により減少の見込み	

<タイ> インドの輸出規制等により 2021/22 年度の輸出量は増加見通し
<ベトナム> インドの輸出規制等により 2021/22 年度の輸出量は増加見込

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1

<米国> 収穫面積・単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

<ブラジル> 2021/22 年度は高温・乾燥の影響で減産、輸出減の見通し

<アルゼンチン> 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

<中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

<カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2022/23 年度)・・・ 2 7

(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

「我が国と世界の農薬をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：豪州ニューサウスウェールズ州の小麦圃場での殺菌剤の散布

(8月28日撮影)

小麦価格は高価格を維持しているため、生産者は、投入コストの上昇分を
補完し、収益が改善することを期待している。

(概要編)

I 2022 年 9 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫が終了し、その他の作物は成熟期から収穫期を迎え、南米では今後作付けが開始される。

品目別にみると、9 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月に過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているものの、今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量が、米国や欧州の乾燥などで前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：8 月）については、穀物（147→145）、植物油（169→163）、乳製品（147→144）等が下落した影響により、7 月より下落（141→138）したが、引き続き高い水準を維持（参考：前年 8 月の値は 128）。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降、下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、9 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の9月8日報告によると、冬小麦は収穫がほぼ終了し、1,918万トン収穫された。とうもろこし等の夏作物は収穫が開始された。

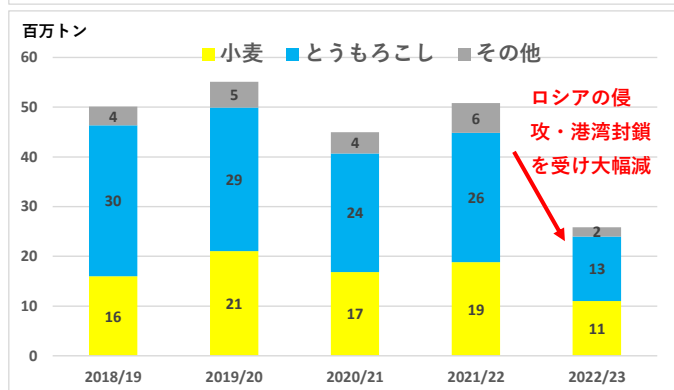
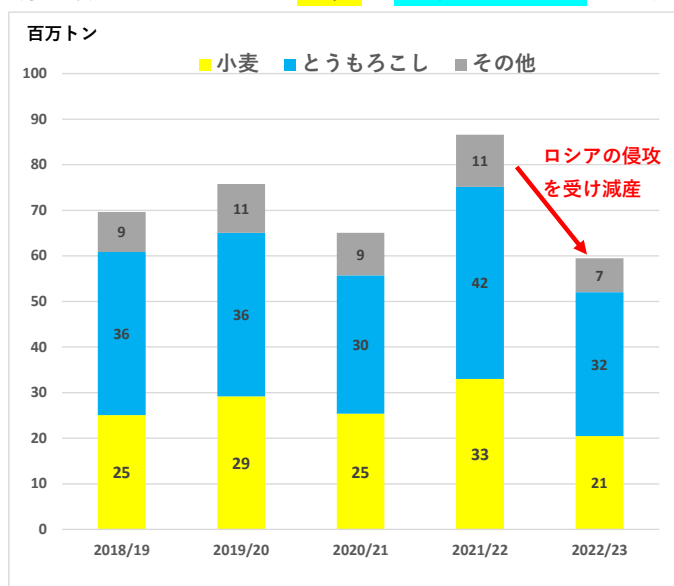
7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開された。9月15日までに穀物・油糧種子が326万トン輸出された。

米国農務省（USDA）によれば、ウクライナの2022/23年度の小麦生産量は、100万トン上方修正され2,050万トンの見通し。ロシアによる侵攻の影響を受け、対前年度比38%減となっている。輸出量は8月見通しから変更はなく、前年度対比42%減の1,100万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、8月の天候に恵まれ8月見通しから150万トン上方修正され、対前年度比29%減の3,150万トン。輸出量は上方修正され、前年度対比50%減の1,250万トンの見通し。

ロシアのプーチン大統領は、9月7日のウラジオストクでの東方経済フォーラムでウクライナの穀物輸出について、アフリカの途上国向けではなくEU向けが多いと批判し、9月16日に開催された上海協力機構サミットのサイドライン会合でトルコのエルドアン大統領と協議した。

(参考) ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.9)

1 米国のとうもろこし、大豆生産見通しは8月の乾燥により下方修正

米国中西部における8月の高温乾燥により、受粉期を迎えたとうもろこしが影響を受け、USDAによれば、収穫面積、単収の引き下げにより、とうもろこしの生産量は、前月から1,050万トン下方修正され、前年度より8%減の3億5,420万トンの見通し。輸出量も250万トン下方修正され、5,780万トンの見通し。

大豆についても、同様に収穫面積、単収の引き下げにより、生産量は、前月から410万トン下方修正され、前年度より1%減の1億1,920万トンの見通し。輸出量も190万トン下方修正され、5,670万トンの見通し。

2 豪州の穀物・油糧種子は3年連続豊作の見通し

豪州農業資源経済科学局が9月6日に公表した「Crop Report」によれば、2022/23年度の冬作物は降雨に恵まれ良好に生育し、過去4位の5,550万トンの見通し。過去最高の豊作となった前年度には及ばないものの、小麦は史上2位の3,210万トンで過去10年平均を30%上回る。大麦は史上4位の1,230万トンで過去10年平均を17%上回る。菜種は史上2位の660万トンで過去10年平均を72%上回る見通し。

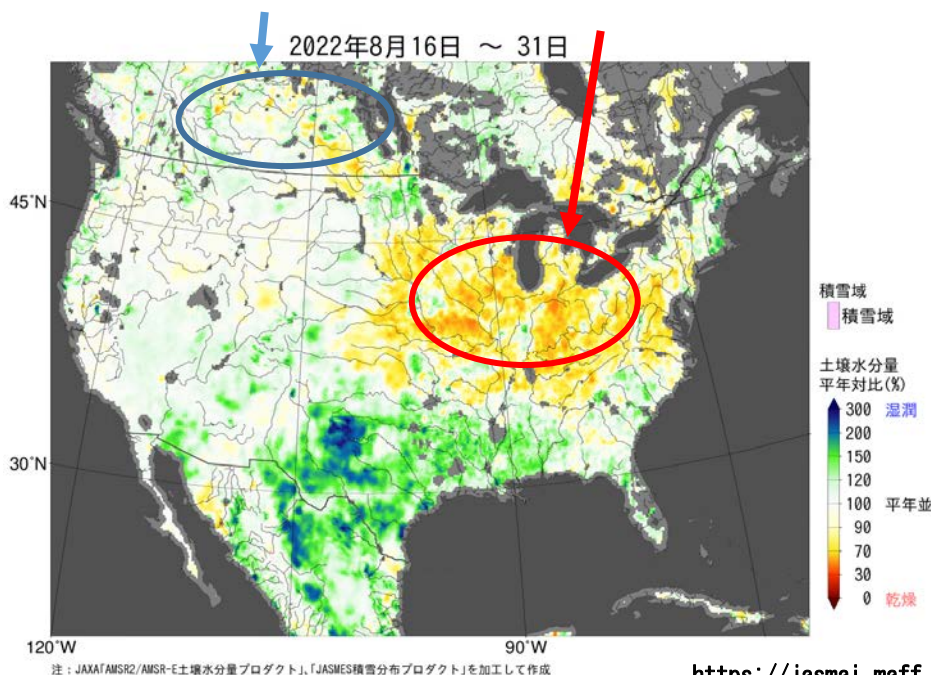
3 カナダの穀物・油糧種子は干ばつの前年度から大きく回復する見通し

カナダ統計局が9月14日に公表した穀物・油糧種子の生産見通しは、西部の平原3州が干ばつとなった前年度と違い天候に恵まれ、大きく回復する見通し。

カナダ西部で主に栽培される小麦については、3,470万トンで、前年度比56%増、対過去5年平均14%増となる見通し。うち、デュラム小麦は610万トンで、それぞれ101%増、21%増の見通し。また、菜種については、1,910万トンで、それぞれ39%増、0.2%増の見通し。

一方、主にカナダ東部で栽培される大豆については、650万トンで、対前年度比4%増も、対過去5年平均は4%減となる見通し。

(参考)北米の土壌水分量。カナダ平原州は平年並み、米国中西部は平年より少ない (JASMAI より)



https://jasmai.maff.go.jp/climate_map/

II 2022 年 9 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8 月末、290 ドル/トン台後半で推移。ウクライナ産の黒海経由での輸出に関し、9 月に入り、ロシア側から合意条件見直しの示唆を受け、供給懸念等から 310 ドル/トン台半ばに値を上げたものの、ロシアの生産量予測の増加見通しから 300 ドル/トン前後に値を下げた。その後、ロシア占領地の住民投票問題等により、ウクライナからの輸出が再び懸念されたことから値を上げ、9 月下旬現在、320 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、8 月末、260 ドル/トン台半ばで推移。9 月に入り、EU の高温・乾燥による作柄悪化懸念や USDA の 9 月需給報告で米国の生産量が市場の予想以上に下方修正されたこと等を受け、9 月中旬に 280 ドル/トン前後まで値を上げた。その後、世界的な景気後退への懸念や米国で収穫期を迎えたこと等から値を下げ、9 月下旬現在、270 ドル/トン台前半で推移。

コメは、8 月末、420 ドル/トン台前半で推移。9 月に入り、パキスタンの洪水による被害や、インドの輸出規制（碎米輸出禁止と一部精米の 20% 輸出税賦課）から値を上げ続け、9 月下旬現在、460 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、8 月末、550 ドル/トン台半ばで推移。9 月に入り、中国の景気減速や新型コロナウイルス感染対策のための都市封鎖による米国産大豆の輸入需要の減退懸念等から 540 ドル/トン前後まで値を下げたものの、USDA の 9 月需給報告で米国の生産量が市場の予想以上に下方修正されたこと等から 9 月中旬に 570 ドル/トン近くまで値を上げた。その後、世界的な景気減速への懸念や米国で収穫期を迎えたこと等から値を下げ、9 月下旬現在、540 ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 600 万トン下方修正され 27.6 億トン。消費量は、前月予測から 50 万トン下方修正され 27.8 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 27.7% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦は上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

（注：数値は 9 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、18.9% となる見込み。

（注：数値は 9 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：中国・インド・パキスタンの穀物生産・貿易動向

本年は世界各国で干ばつや洪水などが発生しており、EUでは、500年に一度とも言われる干ばつで穀物生産に影響があったとみられている。中国でも中部から南部の長江流域で8月に40度を超える高温・乾燥となり、その後洪水も発生した。更に、インド北東部のガンジス川流域でも6月から7月にかけて少雨となったため、インド政府は小麦に続き、コメについても輸出規制を導入した。一方、パキスタンでは6月以降の豪雨等から史上最悪とも言われる洪水が発生した。ウクライナの黒海経由での穀物輸出が再開されたが、各国の天候不順により穀物生産・貿易が影響を受けるとみられることから、今回はアジア諸国の穀物の生産・貿易動向と世界の穀物貿易への影響についてまとめた。

注 文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、中国の小麦は 2022 年 7 月から 2023 年 6 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 中国

(1) 天候の状況と穀物生産への影響

9月6日の国家気象局によるプレスリリースによれば、8月は高温・乾燥となった。このため、中国全土の平均気温は 22.4 度と平年より 1.2 度高くなり、1961 年以降史上最高となった。また、平均降水量は 82.4 ミリで平年より 23.1%下回り、史上 3 番目に少なかった。

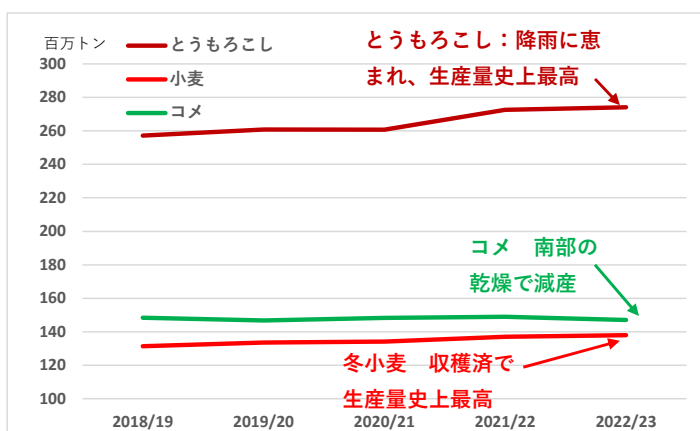
特に中国中部から南部にかけての四川省や重慶市など長江流域で、気温が 40 度を超える日が継続する等、高温・乾燥の影響が大きく、インディカ種(主に長粒)のコメなどの生育に影響があったとみられる。なお、8月下旬には逆に洪水となった。USDA の 9 月予測では、この高温・乾燥の影響により生産量が 200 万トン下方修正され 1 億 4,700 万トンの見通し。

一方、華北から東北にかけては降雨に恵まれ、とうもろこしや大豆、ジャポニカ種(中・短粒)への影響は少なかったとみられている。とうもろこしの生産量見通しは、逆に 300 万トン上方修正され 2 億 7,400 万トンと史上最高の生産量が見込まれている。また、華北平原の冬小麦はすでに収穫が終了しており、春小麦と合わせ史上最高の 1 億 3,800 万トンが見込まれており、この高温乾燥の影響はないとみられる。

(2) 今後の穀物貿易への影響

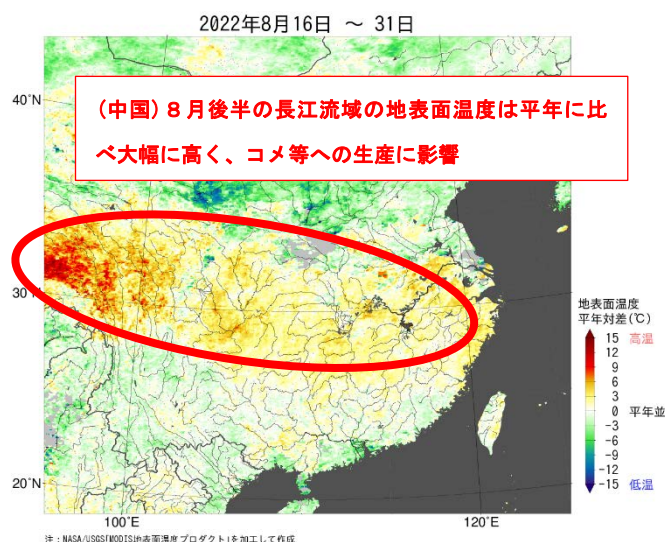
中国政府は、この干ばつ被害に対し、8月末に 100 億元(約 2000 億円)の追加支援策を公表している。USDA によれば、コメの生産量は下方修正されたものの、輸入量については 8 月

図 1 中国のコメ、小麦、とうもろこしの生産量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 9)

図 2 中国の干ばつの様子 (JASMAI より)



見通しから上方修正はされていない。また、とうもろこしや大豆への影響が軽微とみられるため、今のところ輸入増は報告されていない。むしろ、コロナの感染拡大によるロックダウンが地域によって継続しており、経済成長の見通しも不透明なことから、USDA によれば、2022/23 年度の大豆の輸入量は 100 万トン下方修正され 9,700 万トンの見通し。

2 インド

(1) 天候の状況と穀物生産への影響

3 月から 4 月にかけての高温により、成熟期から収穫期の小麦に影響があり、インド政府は、当初 1 億 1,100 万トンの生産を見通していたが、5 月以降見通しが引き下げられた。最新の見通しでは 1 億 300 万トンとなっている。

加えて、6 月以降のモンスーンの降雨不足でインド北東部のガンジス川流域のウッタル・プラデーシュ州等（コメ主産地）でカリフ米（雨季米）の作付けが遅れた。米国農務省の 9 月見通しでは 8 月の見通しから 200 万トン下方修正され、前年度比 2.9% 減の 1 億 2,650 万トンとなる見通し。

(2) 今後の穀物貿易への影響

インドは、小麦の減産見通しを受け、輸入国の食料安全保障に支障がある場合を除き、5 月に小麦を輸出禁止とした。さらに 9 月 9 日から、コメの減産見通しに伴ない、碎米の輸出禁止と、高品質のバスマティ米やパーボイルド米を除く精米等に対し 20% の輸出税を導入した。

USDA によれば、関税賦課の対象外となるバスマティ米は年間 430 万トン輸出され、パーボイルド米は、2022 年 1 月から 7 月までで 410 万トン輸出されていた。パーボイルド米は圧力をかけ蒸したコメで、インドの一部、バングラデシュ、アフリカの一部、サウジアラビアで消費されている。

図3 インドのコメ、小麦の生産量・輸出量の推移

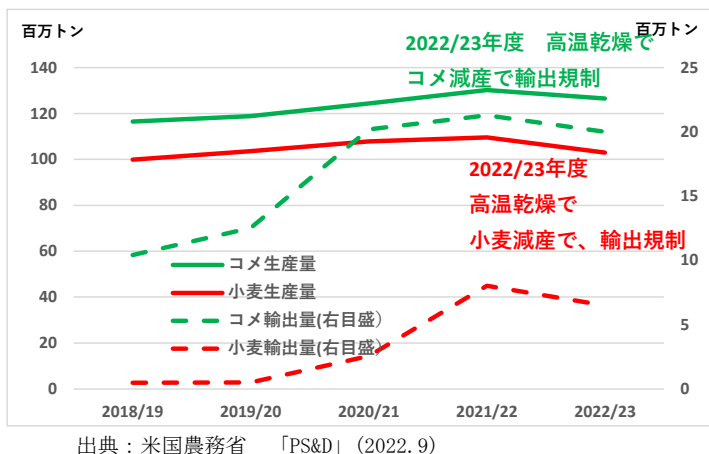
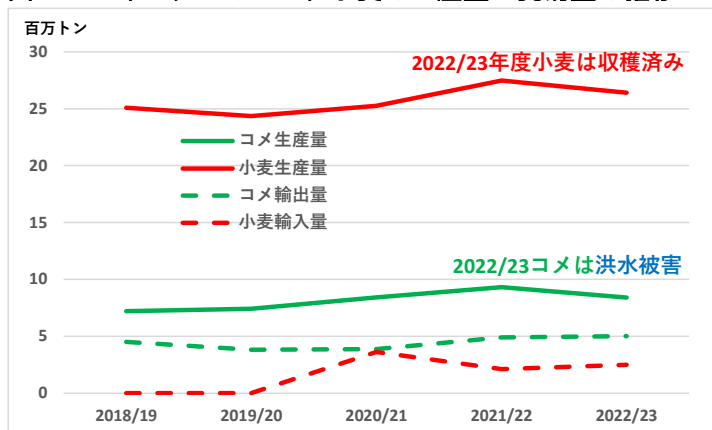
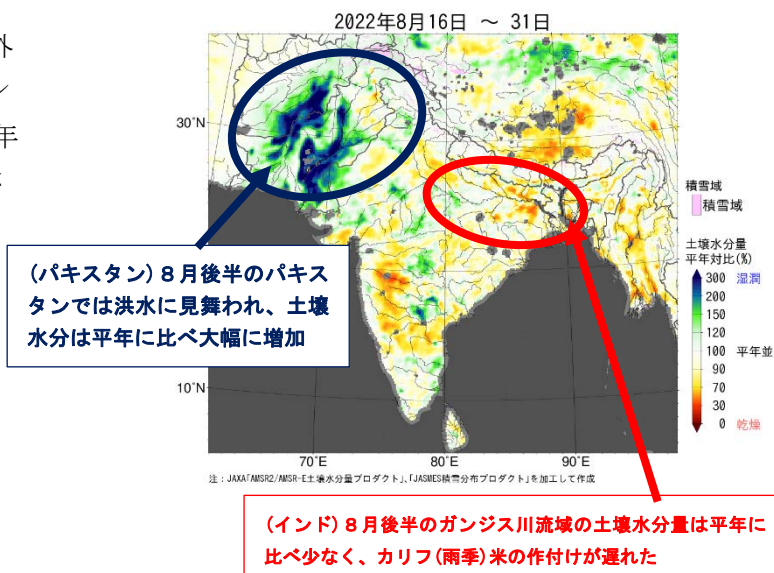


図4 パキスタンのコメ、小麦の生産量・貿易量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 9)

図5 インドの干ばつとパキスタンの洪水（JASMAI より）



3 パキスタン

(1) 天候の状況と穀物生産への影響

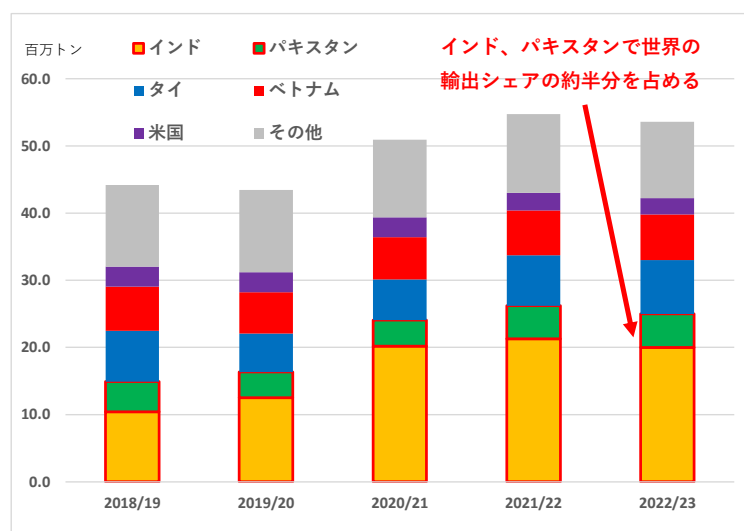
報道などによると、6月以降モンスーンによる降雨過多に加え、インダス川上流地域の氷河が溶けたことから大規模な洪水となり、8月末時点で国土の1/3が被災したとみられている。USDAのGAINレポート(農務官報告)(9月2日)などによると、洪水被害の大きいのは南部のシンド州とみられる。

USDAによれば、同州の生産シェアはパキスタンのコメの4割、小麦の1～2割程度を占めている。穀物生産シェアが最も大きいのはパキスタン東部のパンジャブ州で、コメは5割、小麦は8割を占めている。USDAの9月報告書によれば、これから収穫期を迎える2022/23年度のパキスタンのコメ生産量は8月予測の890万トンから洪水被害により50万トン下方修正され、840万トンと見込まれている。一方、小麦については、2022/23年度の小麦の収穫は既に終了しており、10月以降洪水の水が引かなければ、2023/24年度の作付けに支障が出るとみられるが、主産地のパンジャブ州は被災を免れたとみられている。

(2) 今後の穀物貿易への影響

USDAの9月見通しで、洪水被害によりコメの生産量は下方修正されたが、世界の輸出量の1割を占める輸出量はインドの輸出規制による代替需要から10万トン上方修正され、500万トンとなった。一方、小麦については今のところ2023/24年度の小麦生産量への影響は限定的とみられる。

図4 世界の主要コメ輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022.9)

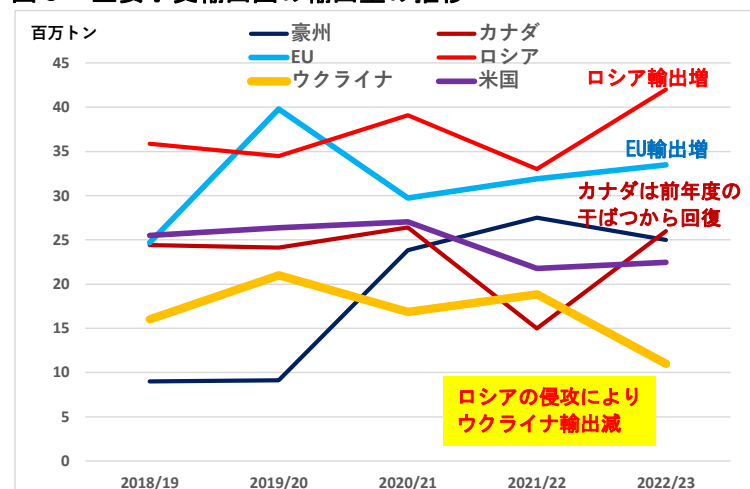
4 世界の穀物貿易への影響

(1) コメ

インドとパキスタンのコメの輸出シェアは合計すると世界のコメ貿易の約半分を占めており、今後のコメ貿易への影響が懸念されている。

パキスタンについては、2022/23年度産のコメの被害状況や、輸出インフラへの影響等についての詳細の把握がまだ進んでいないとみられる。ただ、現地報道によると、シンド州では60万ヘクタールの圃場のうち40万ヘクタールが水没、パキスタン全体で圃場の約70%が被災し、650万トンが収穫不能となった模様。

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



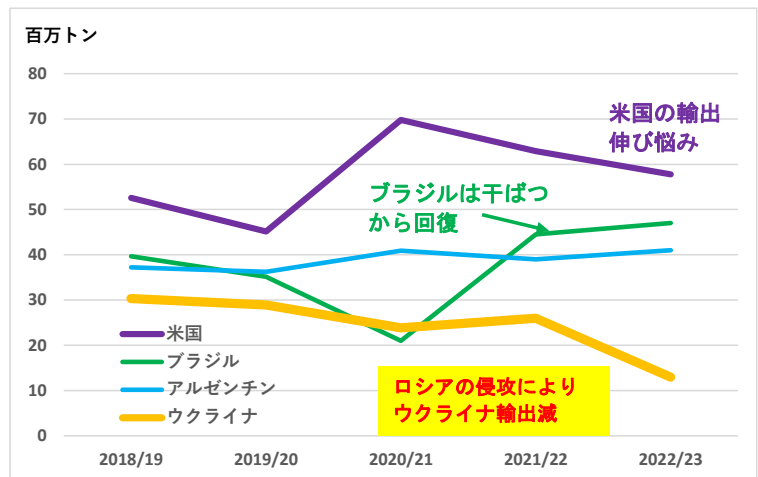
出典：米国農務省 「PS&D」(2022.9)

インドは高価格で取引されているバスマティ米及びパーボイルド米を除くコメが規制の対象となっており、途上国向けなどへの影響が懸念されるところである。

なお、USDA の 9 月見通しによれば、インドの輸出規制に伴ないタイとベトナムの輸出見通しが上方修正された。

2007 年～2008 年の穀物価格高騰時には、インドによるコメと小麦の輸出規制に対応して、他のアジア諸国でコメの輸出規制を行った国もあった。このため、アジアのコメ輸出国への影響について今後注視が必要である。

図 6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.9)

(2) その他穀物への影響

パキスタンの 2023/24 年度の小麦の作付けが洪水により相当遅れるようであれば、今後、世界の小麦貿易にも一定の影響はあるとみられている。

更に中国は、大豆だけでなく、コメについても世界の最大コメ輸入国であり、特に飼料向けのとうもろこしや小麦価格が高水準で推移してきたため、インド産やパキスタン産の碎米を一部飼料向け等に輸入してきた。コメ輸出国のベトナムも飼料向け需要等に一部インド産米を輸入している。

最近、米国産小麦の増産見通し、4 者合意によるウクライナの穀物の輸出再開や、ロシア産小麦の豊作見通しもあり、8 月には、小麦の国際相場は 2 月のロシアのウクライナ侵攻前の水準までは下落した。しかし、上記のようなコメに代替されていた需要がインド産米の輸出規制などにより、小麦やとうもろこしに戻ってくる可能性も想定される。コメの世界の貿易量は 5,000 万トン前後と、2 億トン近くに上る小麦やとうもろこしと比べて少ないが、引き続き穀物の貿易状況に注視が必要である。

【参考】“ジャスマイ”とは？

■農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

農林水産省が提供する農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）は、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）と米国航空宇宙局の衛星観測データを活用し、海外の主要穀物生産地帯における穀物・農作物の生育に関わる気象データ及び作物生育指標データを地図上やグラフ形式で提供している。これは、世界の主要穀物の生育状況のモニタリングなどに活用可能で、2003年1月～直近までのデータを公開している。JASMAIが提供するデータは農林水産省HP上で一般に公開されており、無償で閲覧可能。

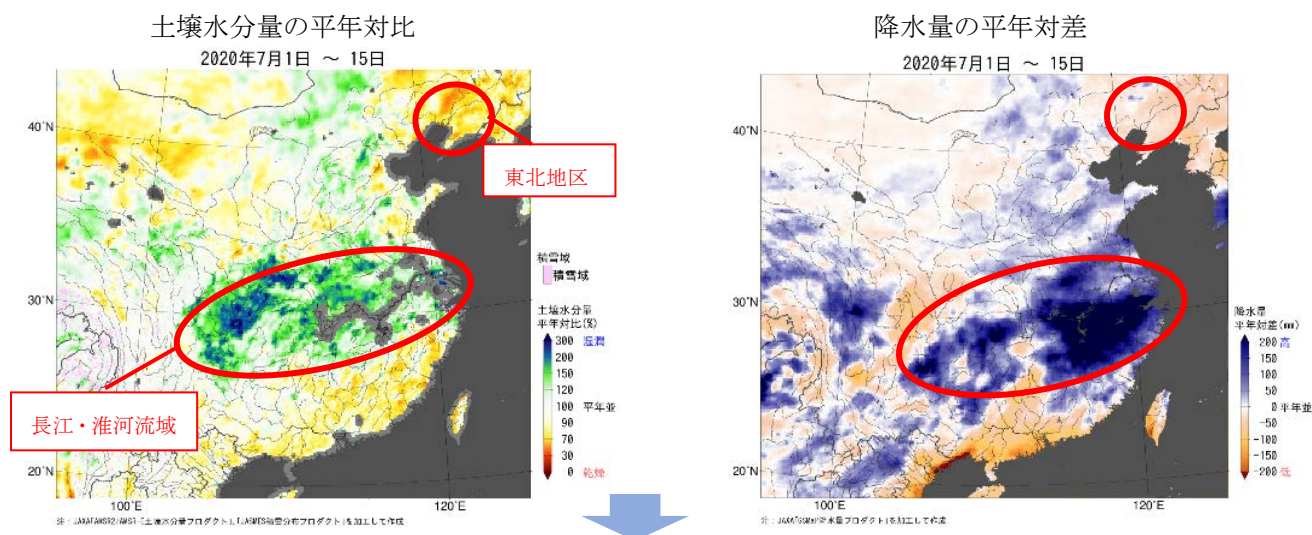
○農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）：https://jasmai.maff.go.jp/climate_map/

※JASMAIの画像・データを利用する際は、ユーザーガイドの記載に基づき出典を明示する必要。

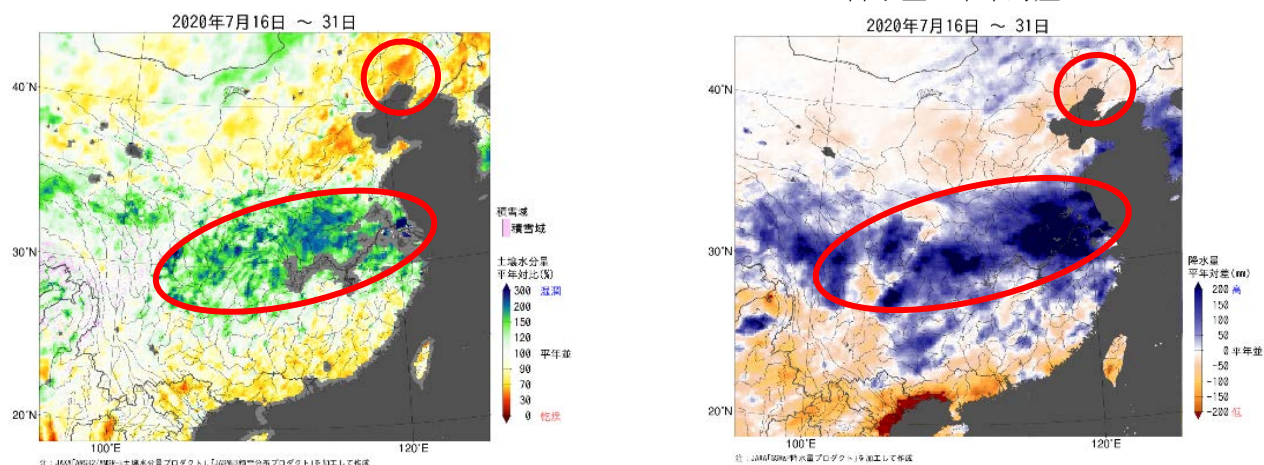
【活用事例】2020年7月中国の降雨状況をモニタリング

JASMAIの降水量年対比および土壌水分年対比の地図データを活用することで、中国の長江・淮河流域の豪雨の状況と、東北地区の降雨不足の状況を把握（海外食料需給レポート2020年8月号の報告時に掲載）。

○2020年7月1日～15日



○2020年7月16日～末日
土壌水分量の年対比

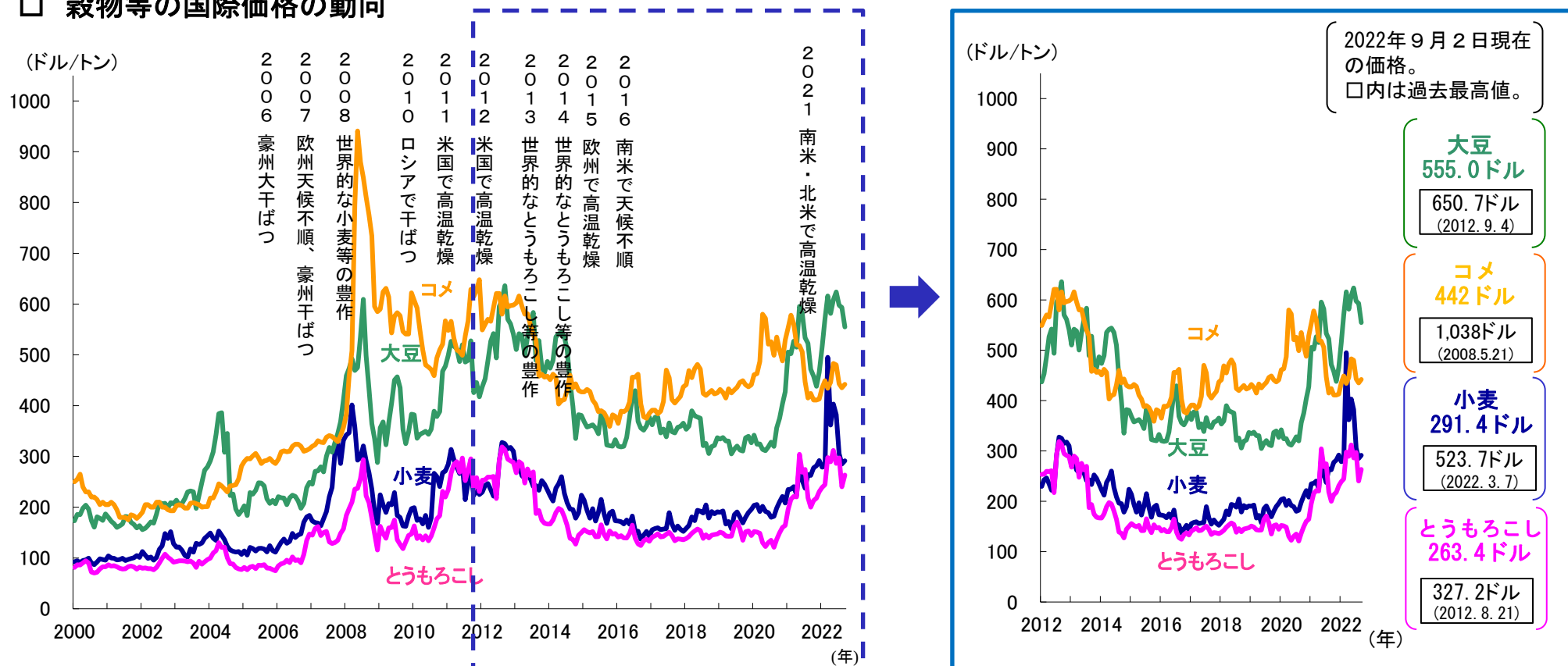


【参考】海外食料需給レポート2020年8月号（URLhttps://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/monthly/attach/pdf/r2index-19.pdf）

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



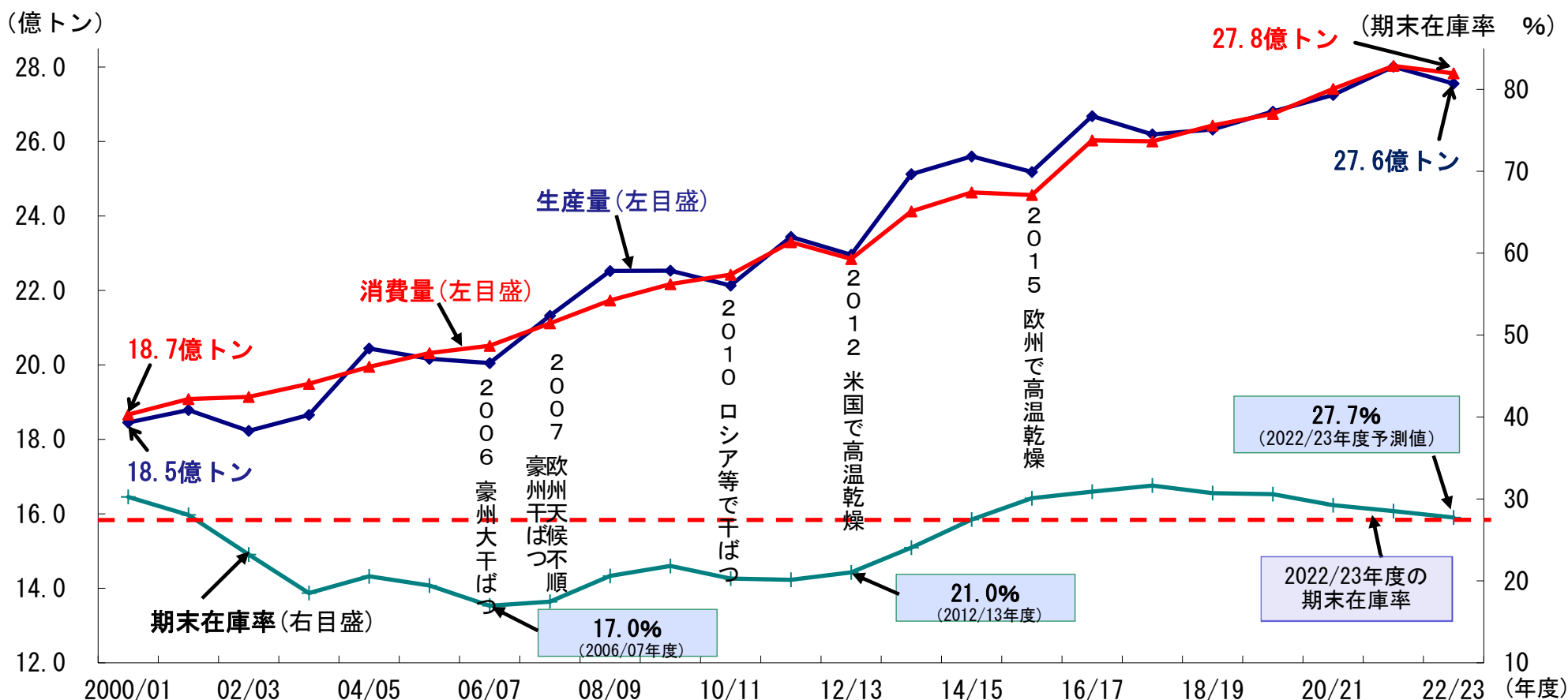
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの2022年9月2日現在の価格は、8月31日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.7%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

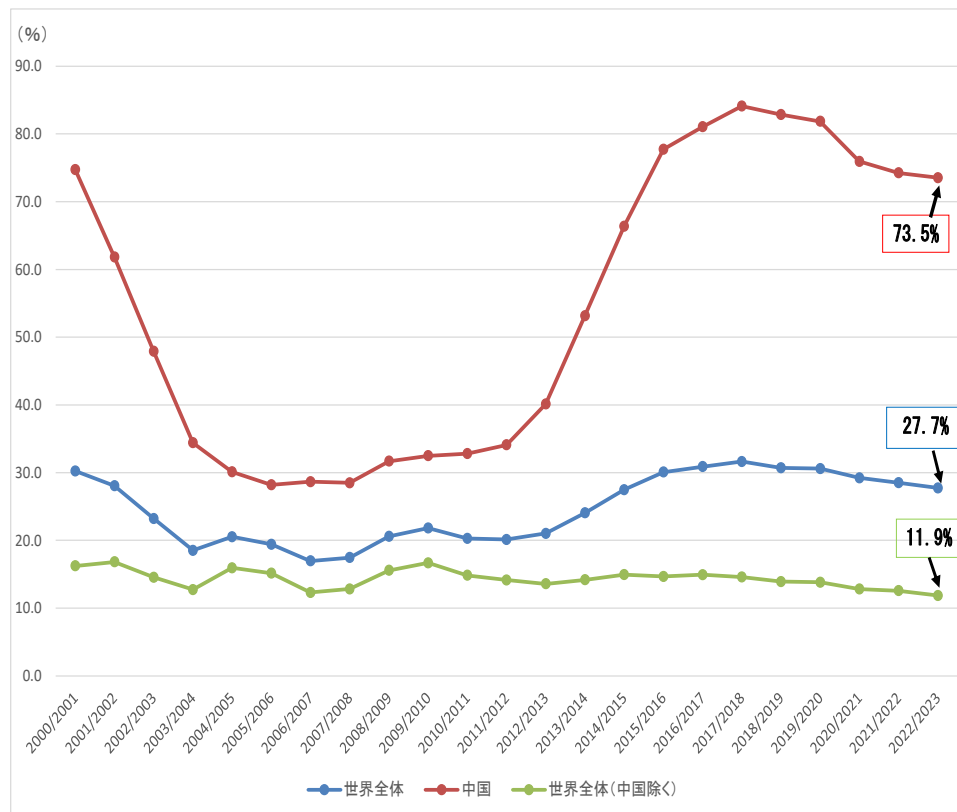


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (September 2022)、「PS&D」

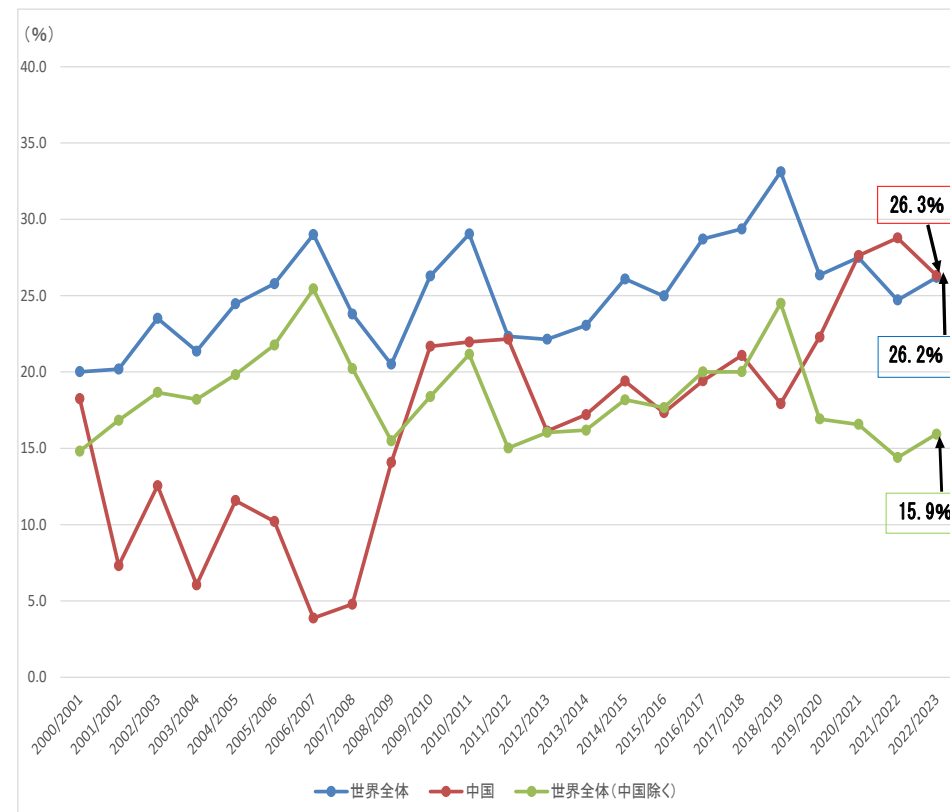
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(September 12, 2022)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

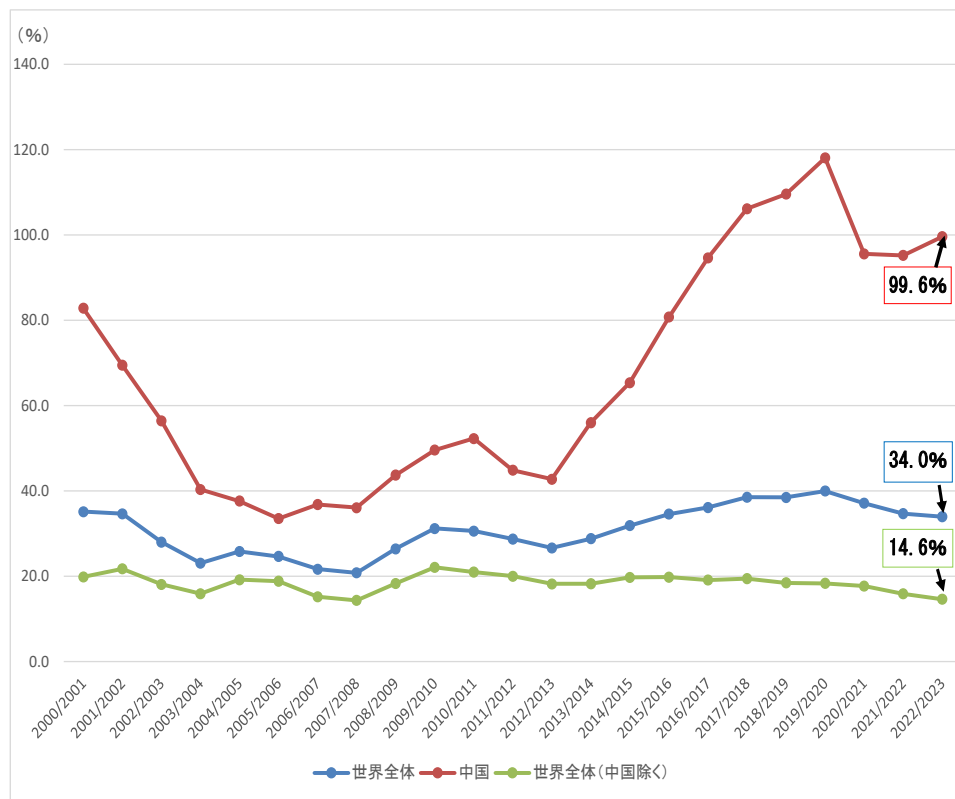
2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／(消費量＋輸出量－輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量)×100

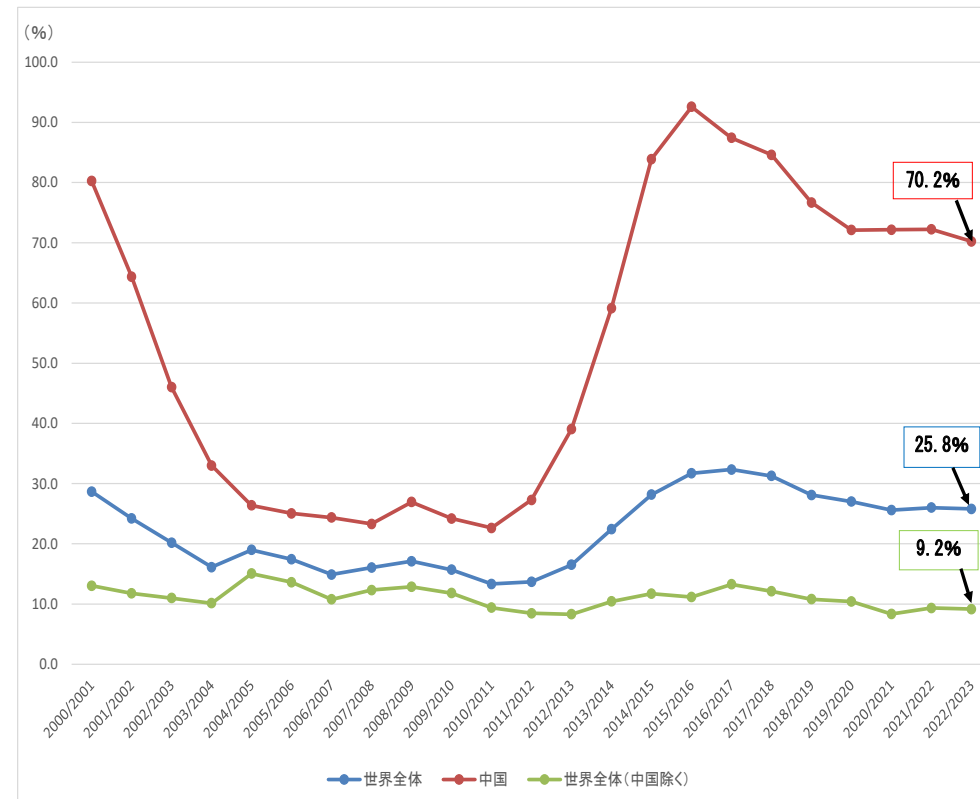
4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(September 12, 2022)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

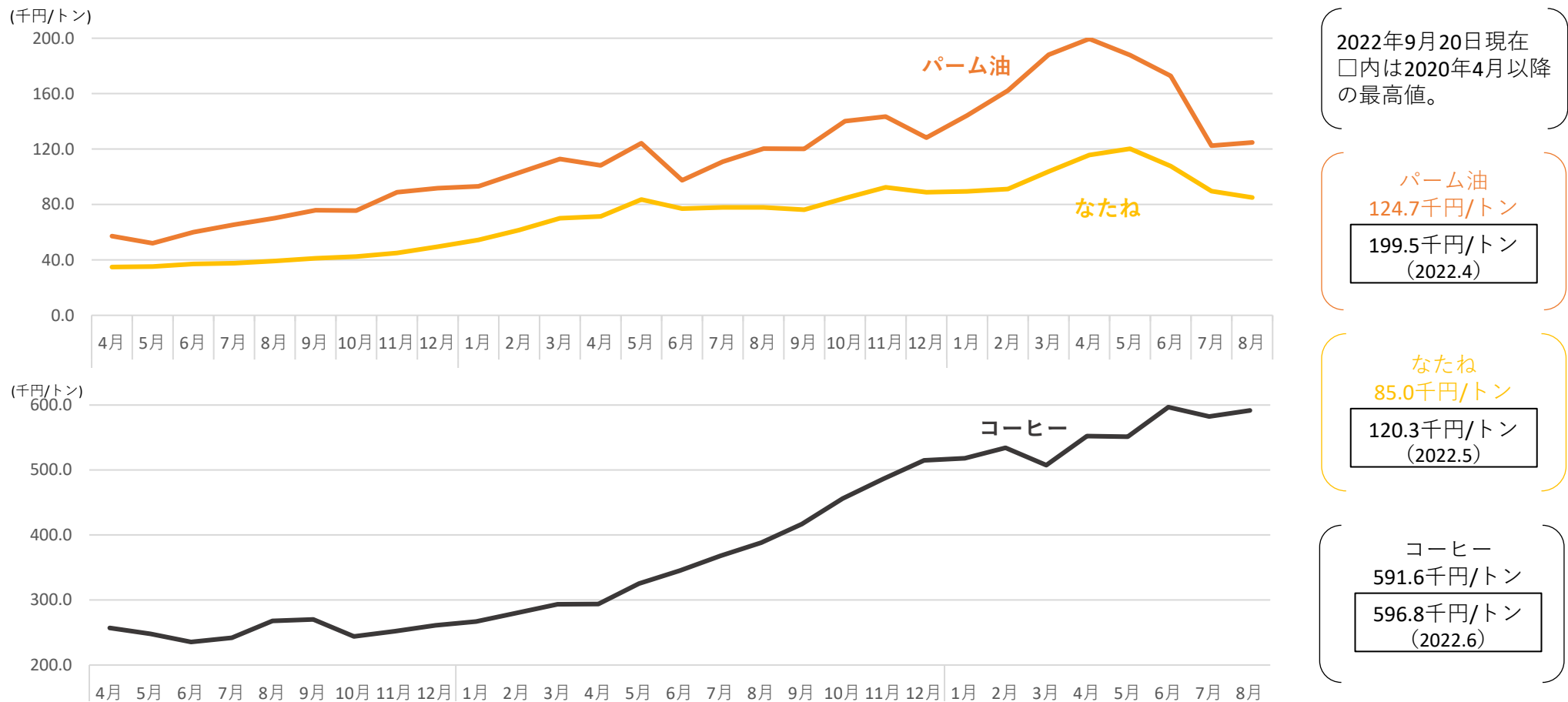
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（５月２３日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

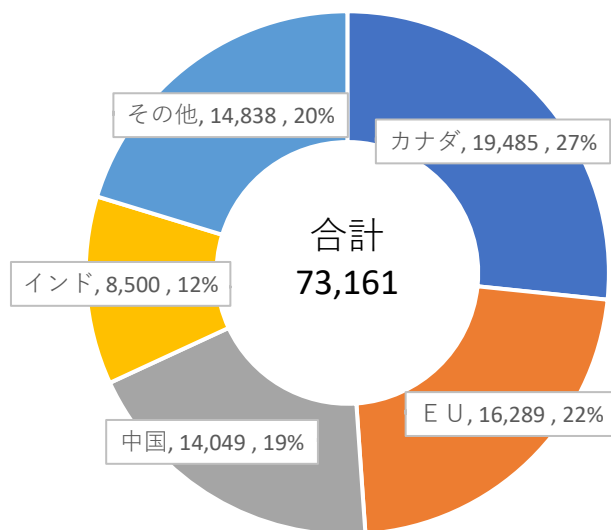


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

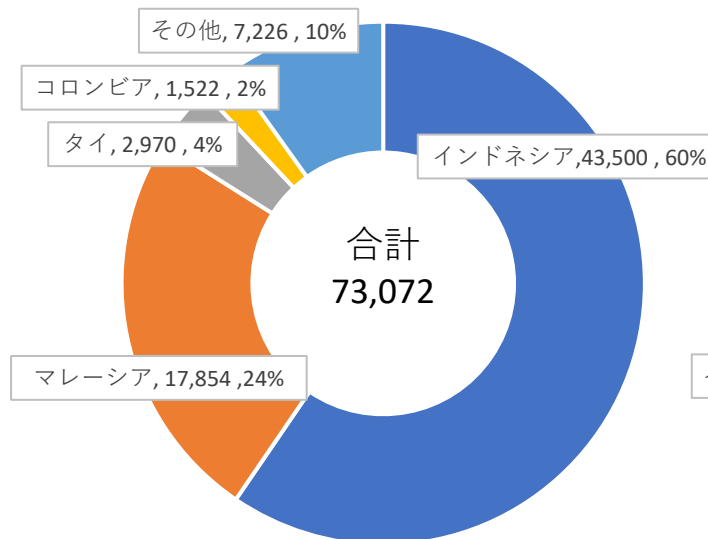
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



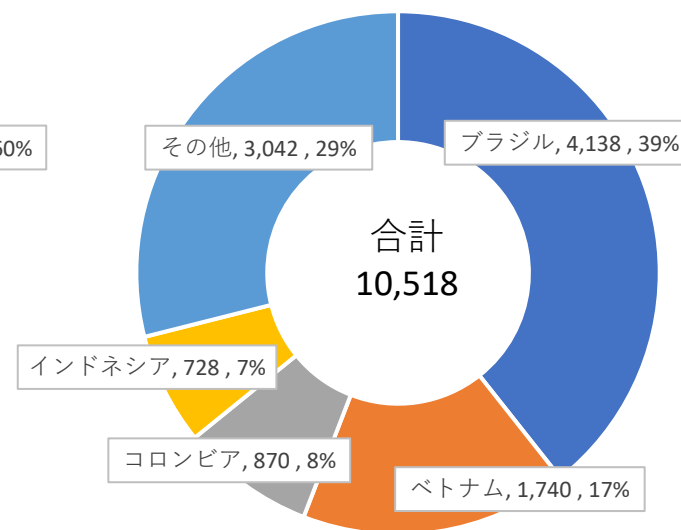
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
コーヒ一	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年8月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.4～150.4（前年同月比で－0.3%～39.3%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年3月～令和4年8月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.2	108.0	107.5	107.9	111.9	114.4	15.0%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.9	100.1	100.1	110.0	113.7	114.9	14.6%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.9	103.1	104.0	104.7	104.9	105.1	4.3%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	132.2	134.8	135.4	139.2	145.8	150.4	39.3%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.9	100.7	101.0	99.8	99.9	100.1	1.2%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	120.3	123.9	126.1	125.0	125.2	126.5	14.7%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	99.3	103.0	105.3	104.0	106.2	106.6	5.9%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.7	99.1	99.5	99.3	99.1	99.4	-0.3%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.9	102.4	102.6	103.2	103.8	104.2	4.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年3月～令和4年9月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	104.6	105.1	104.6	105.9	109.8	111.1	110.7	-0.4%	12.0%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	99.0	99.0	110.0	111.2	111.2	110.0	-1.1%	11.1%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	102.0	101.6	102.4	102.9	103.3	103.7	104.2	0.5%	-0.8%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	126.4	129.6	130.8	132.7	139.1	148.3	156.8	5.7%	43.9%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.4	99.0	99.6	98.8	99.8	100.4	101.7	1.3%	-1.0%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	112.1	117.2	117.2	118.3	117.2	118.3	116.9	-1.2%	9.7%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	98.6	105.0	104.5	105.0	105.0	104.5	108.0	3.3%	4.9%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.3	99.3	99.3	99.0	99.3	98.6	-0.7%	-0.9%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年10月号（9月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）22年上半期の牛肉輸出量は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002388.html

（豪州）牛肉輸出量、日本向けは米国産に押され大幅減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002392.html

（ブラジル）22年牛肉輸出量は前年を大幅に上回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002393.html

◆豚肉

（米国）22年上半期豚肉輸出量、ラテンアメリカ向けが好調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002394.html

（EU）豚枝肉卸売価格は高水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002395.html

（中国）豚肉価格は急激な上昇を見せるも、需給は安定の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002396.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆鶏肉

（米国）鶏肉卸売価格は下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002389.html

（ブラジル）22年鶏肉輸出量は増加傾向で推移、輸出単価は大幅高

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002397.html

（中国）22年上半期の生産量はわずかに減少、価格は上昇基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002398.html

◆牛乳・乳製品

（EU）22年上半期の生乳出荷量は前年同期を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002399.html

（豪州）21/22年度の生乳生産量、前年度よりやや減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002400.html

（NZ）22/23年度の生乳生産量、前年割れの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002401.html

◆飼料穀物

（世界）22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002424.html

（世界）南米での生産増などから大豆期末在庫は1億トン台の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002391.html

（米国）22/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は10%を割り込む見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002402.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002404.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.9)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等